不確かな融合

『新明解国語辞典』編集委員
倉持　保男

気になる言葉「ヤバイ」

「今日さ、授業中におしゃべりトカしていたら、先生ににらみつけられちゃった。あれって、ヤバイよね。」

「そうだね。ヤバイね。平常点に影響するかもね。」

こんな女子大生とおぼしき者どうしの会話を電車の中でよく耳にする。「おしゃべりトカ」の「トカ」も気になるが、それはひとまず措いて、「ヤバイ」に話題を絞ろう。

男女を問わず、若者の間で「ヤバイ」が猖獗を極めている。この「ヤバイ」は、語原ははっきりしないが、元来、盗人仲間や香具師の間で用いられていた隠語で、身に危険が及ぶような事態を指す言葉であったようだ。筆者が子供のころ（第二次大戦前後）には、親から使ってはいけない言葉だと教えられたことを覚えている。ところが、大学の教師になった昭和四十年代ごろから、若者の日常語になったかのように頻用されるようになり、当初は耳障りで、違和感や不快感を抱き、「そんな言葉は使うな」と心の中で叫んでいたものだ。最近は感覚が麻痺したとみえ、さほど気にもならなくなった。

とは言え、対話の相手が自分自身の場合には、心中穏やかならざるものがあるらしく、七・八年前のことだが、授業終了後に、日ごろサボりがちな学生が教壇に歩み寄り、「僕の出席回数、（単位認定上）ヤバイですか」と問うてきた。思わずかっとなって「『ヤバイ』とはだれに向かって言っているのだ」と怒鳴りつけてしまった。怒鳴られた当人はただポカンとするばかりであった。この出来事を目撃していた学生もいたので、次回の授業で、何故に怒鳴りつけたのか、その理由を縷縷説明した。必修科目の単位取得が可能かどうかは重大問題で、万一不可能なら、当人に災難が及ぶのだから、正に「ヤバイ」問題であることは疑いなく、文脈上は何ら誤りはないが、使用する場面（特に相手に対する配慮の面）が不適切であるといったことを出席していた学生は一応納得したようだった。これで一安心と思った矢先に、ある学生が真顔で「では、そういう時（身に危険が迫るような場合）に何と言えばよいのか。他に言いようがないと思うのだが」と、切り返してきた。細部は覚えていないが、その時々の事態や状況に応じ

今回の辞書

『大辞林　第三版』
三省堂／2006年

た適切な表現を選んで言え、と応じたような覚えがある。

自分の身に危険や災難が及ぶ、あるいは好ましくない結果を招くといった範囲で使われている分には、言葉の出所がどうあろうと許容せざるを得ないのかもしれない。問題は、「ヤバイ」が際限なくといってよいほど多義性を帯びつつあるということだ。少数の言葉を多義的―言葉を換えれば、包括的に使って日常の言語生活を営む傾向が若い世代に広がっているのが気に掛かる。旨いものを初めて口にして、「これヤバイ」と言う。何が「ヤバイ」と判断させる要因となったのか、味のよさを知らなかった無知に対する反省か、病みつきになることへの恐れか、などと推測したところで、結局は理解不能だ。

辞書における「ヤバイ」の扱い

古い世代の人間には理解不能な用法であっても、辞書の世界では無視するわけにはいかないと判断したのだろうが、『大辞林』（三省堂刊、第三版、二〇〇六年一〇月）には、

① 身に危険が迫るさま。あぶない。「―・いぞ、逃げろ」

② 不都合が予想される。「この成績では―・いな」

③ 若者言葉で、すごい。自身の心情が、ひどく揺さぶられている様子についていう。「この曲、―・いよ」〔若者言葉では「格好良い」を意味する肯定的な文脈から、「困った」を意味する否定的文脈まで、広く感動詞的に用いられる〕《筆者注：―に「やばい」の語幹「やば」が入る》

と、一項を立てて取り上げている。「格好良い」と「困った」が肯定・否定と対比されるものであるかはともかく、言語現象を忠実に反映させようと、若者言葉を積極的に取り上げたことには意義がある。筆者のかかわっている同じ三省堂の『新明解国語辞典』でも、次の版では、何らかの対応をするかどうかが編修委員会の話題となるだろう。

不確かな融合

『大辞林』の③に言う「感動詞」で思い当たることがある。これも大学勤めをしていた時のことだが、卒業論文の相談に来た学生数人を相手に、いかにも彼らが「ヤバイ」を使いそうな場面をいくつか設定し、今日は「ヤバイ」を使うことを容認するから、思い切って使ってみなさいと持ち掛けた。しばらく自由にしゃべらせていると、「ヤバイ」を乱発する。三十分ほど経って、文脈からは何が対象となっているのか判断し難かった用法を拾い出し、どんな気持ちを表そうと思ったのか発言者に問い質してみた。かなり苦しい説明であっても何とか理解できたのは、質問した中の半数にも満たなかった。では、なぜ「ヤバイ」と言ったのかと問い詰めると、何となくムード的に、とか、みんなが使うからといった要領を得ない答えしか得られなかった。どうも自分の発言を明確に意識化し、それに責任を負うよりは、安易に付和雷同して他人と同じ言動をとっている方が、彼らの社会では安全な生き方のようである。下手に自己主張をしたり、他人の言動に疑問を投げかけたりすることは、仲間から疎外される因となって、好ましい人間関係を保つ上で、必ずしもプラスには働かないようだ。互いに相手を認め合って共存する上での符丁のような役割がこの「ヤバイ」に負わされていると言っても過言ではない。どんな意味で言葉を使ったのかを確認することもなく、意思を通じ合っていると思い込まざるを得ないとは何とも曖昧且つ不確かな融合である。

くらもち　やすお　一九三四年、東京都生まれ。日本語検定委員会評議員。東京大学文学部卒業、同大学院人文科学研究科修了。日本語学専攻。慶應義塾大学教授、大正大学教授を歴任。